

事業概略書

痴呆性高齢者の長期介護に関する研究

痴呆性高齢者の長期介護の影響要因に関する研究

東京都（報告書 A 4 版 2 5 0 頁）

事業目的

本研究の目的は、地域の介護力を高めるための「関係者側のあり方」- 住民への関わり方、地域福祉システムの組み立て方、業務のあり方、任用や研修のあり方など - を中心テーマとし、地域介護力を高める方策を検討することとした。

事業概要

これまで関係者は住民の介護力を高めようという姿勢に欠けていた。福祉制度も関係者に住民の介護力を高めようとするを促しているとはいえない。そこで、委員同士が発想を出し合う作業を柱に、その努力をしている施設関係者や保健師、ケアマネジャー、ヘルパー、NPO のリーダー、介護家族などを個別に招いて、活動状況を聴取しつつ、本テーマについて検討していくという方法を採用した。

事業結果

関係者は福祉の営みに住民の本格的な参加を得ようという気は無いという実態があるゆえに、関係者に、各自の業務や活動を通して地域の福祉力を高める努力をと説いても、たいした成果は期待できない。そういうことなら、福祉の仕組みそのものや、関係者の業務内容や活動拠点、活動現場等のあり方を、地域の福祉力が働かざるを得なくなるようなものに変えてしまう以外にない。結果的には、柱になる「発想」群とそれを具体化した実践課題を導き出すことが、委員会の主な仕事となった。

具体的には第 1 の柱として「住民主義」という発想が抽出された。福祉の営みの主導権を関係者から住民へ移行させる。福祉のやり方も住民の流儀に変える。まず住民の営みがあり、それを関係者が側面支援する。サービスはなるべく受け付けない、できるかぎり住民に手渡す、と業務規定に盛り込む。活動（サービス）の拠点も住民側に置く（世話焼き宅や井戸端会議場、当事者宅に）。そこへ関係者が出向き、福祉課題と解決策を住民と一緒に考えていく。

第 2 の柱として「地元主義」の発想というものが得られた。施設関係者も利用者も一定地区内に「閉じ込め」る。小地域内の施設に足元の利用者を受け入れ、足元の職員を雇用する。小さな地域の中で関係者も利用者も住民も日常的に関わり合うことで、めざす目的が果たされる。

第 3 として「コミュニティ・マネジメント」という発想が抽出された。今の関係者は自分の担当した対象者（ケース）しか目に入らないという状況がある。これからは対象者が住んでいる地域社会そのものを育てていくという考え方に転換していく。

第 4 の柱として「当事者主義」が挙げられた。当事者を福祉の真の主体者に据える。彼らが必要な資源を周囲から発掘し活用するようになれば、地域住民がいままで以上に参加する（関わる）ことになる。

さらに「天性主義」という第 5 の発想も明らかになった。地域・近隣の世話焼きのように、住民の中でもともと住民の流儀を体得・実践している人をヘルパー等に任用する。

こうした発想群を実際にどうやって実現させていくのか。相当の覚悟が、関係者や制度づくりに関わる公的機関の担当者に求められている。これらの発想へと転換しどう具現化していくかについての戦略についてさらに検討を深めていくことが今後の課題となった。

事業実施機関

東京都 社会福祉法人浴風会 高齢者痴呆介護研究・研修東京センター

〒168 - 0071 東京都杉並区高井戸西1 - 12 - 1

03 - 3334 - 2173